

---

# その声

みなどりとうや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その声

### 【Nコード】

N6339U

### 【作者名】

みなどりとうや

### 【あらすじ】

「パプー併載」魂が宿る物・者たち一切の声を聴き、話すことが出来る青年が経験する出会いと別れの物語

ノック3本目 『その名前』

\*

「そう言えばニイちゃん、あんたの名前を聞いてなかったな」

「俺は吉岡良二。何だっけ、五条藍白祥絵之左エ門？ あんたほど複雑怪奇な名前じゃないよ」

「まあそうだろうさ。俺はお国さんが認める宝物だ、格上つてもんだ」

好きにはなれないけどね、と吉岡は思った。

「それじゃ、いつかまた出会えたら」

「そうだな。俺はしばらくは生きられるらしいから、また来てくれ。俺と声を通じて話が出る相手など、ここ何百年で二人いたただけでそうそういないからなあ、待っているからなあ」

吉岡が、今まで話しかけていたその国宝指定の水差しに向け、小さく手を振る動作をすると、角に立っていた警備員が吉岡に近寄ってきた。

吉岡もいつものごとくその気配に気づき、毎度のことながらと、そそくさとその場を立ち去った。

ミュージアムの外に出ると、吉岡は大きくひとつ伸びをした。

「あー……さっきの青絵の水差し、何でアレで国宝なんだろうなあ。

あんな傲慢な奴の、どこがいいんだか」

芝生の方へと歩いていくと、吉岡の足下に、雀と鳥が舞い降りた。吉岡は、また陳情か、とため息をついた。

「話が出来るといふのは、あなたですか」

「俺と話をしてください！ 近頃の人間、ひどいんですよ！ 俺たちのクチバシを、金と交換したりするんだ！」

吉岡の前で鳥が大きな声で鳴いた。吉岡はその場にかがんで、

「カラス君、君の本当の名は聞かないよ。君らは人間に長い間かけて迷惑をかけすぎたんだ。だから人間は、君らを追い払う為に狩人を募集して、その狩りの証拠にクチバシを持ってこさせてるんだ。君らのクチバシに価値がある訳じゃない、缶ジュース一本にさえならない。それにまた、狩られるのは君自身に罪があるわけでもない。仕方ないことなんだよ」

と言った。鳥は、

「俺たちの仲間のせいなんですか、本当に」

カァーとしか響かない鳴き声だが、吉岡の耳には必死の訴えが聞こえていた。

「うーん……人間が作ってる作物を食べたりとか、あと赤いビニールやグレーのビニールに入っただものを、破って漁る仲間なんか、いないかい」

「います、いますよ。美味しい匂いがするんですよあの中から」

「君もその口か。それは人間が出した生ゴミだよ。ゴミを散らかす

輩が疎んじられるのは、君も分かるだろ？」

「ゴミ、なんですか？ 美味しいですよ、ハズレもありますけど」

「当たり前だろうがハズレだろうが、人間の目から見ると、ゴミを散らかす害鳥なんだよ、カラス君、きみたちは」

鳥が少しうつむいて地面をついばむ。

「さあ、僕の元にあれこれやっかい事を持ってこないでくれ、その雀も、どこで噂を聞きつけてきたか知らないが、人間と動物の間に立つてのもめ事仲裁なんていい加減うんざりしてるんだ。金輪際来ないよう、君の仲間たちにも伝えてくれ、頼んだよ」

雀は、媚びるように跳ねて吉岡に近づいたが、吉岡は手でそれを払う仕草で応えた。

二羽の鳥が同時に羽を広げ、沈み始めた太陽の方角へと飛んでいった。

「傲慢な国宝に、どこで話を聞きつけたか分からない鳥か。今日はついてないな」

吉岡は飛んでいく鳥たちを目で追いつつ、ズボンのポケットに手をつ突っ込んで階段を降りていった。

\*

「じゃあ大戦当時でも生き残れる自信があったの？」

吉岡はがっしりとした将棋盤に手を置き、独り言、というよりはつきりと言葉を出した。

「儂くらいになるとな、いつ死ぬか死なんかくらいは、まあ何となくだが分かるもんだわなあ。人間の年月で言えば、あと十二年と二ヶ月少々、つてとこじやろう。お前さんの息子が、儂で遊んでくれれば本望なんだがなあ」

「まだ結婚もしてない俺に言われてもなあ」

手を離し、布巾を取ると将棋盤を拭く。

「ああ、いい気分いい気分。誰も気にすらかけてくれんで朽ち果てるのだろーと思っていたからなあ、まさか吉岡の血に、『耳』が出るとは思ってもみなかったでの」

「耳、ねえ。喋る相手も出来るから、口、でもいいようなもんだよな」

「はは、まあ、耳、は通称だから変えようもないて。それより大学は良いのか？ 先々週に蔵の扉が開いた折りに、課題の提出が云々と言っておったように思ったが」

「もうとつくに提出したさ。じいちゃんの時代と違って、今の大学は就職のための通過点みたいなもんだからな、学士様、なんて価値もないのさ、卒業したって」

「ほほう。学士号の価値すらも、時代で変わるものか。誰も儂を挟んで将棋を指して談義などしてくれなんだで、外の価値観がもう掴めんようになってしもうたわ」

「ま、外は外でぐちゃぐちゃさ。蔵の中で余生を過ごす方が幸せだと思っよ、いつも言ってるけどさ」

「ワシヤ将棋盤だでの、将棋指してもらってこそ本望なのだがなあ。お前は将棋のしの字も学ぼうとせんし」

「昔、親父と俺で指したの、覚えてないのか？ 呆けたかジイサン」

「ああ、あの事はもう言わんでくれ、お前もちくちくと性格悪いのう」

「はは、ごめんよ。それ、綺麗になった」

足まで拭われた将棋盤は、いつそう艶を増したようであつた。

「助かるのお。風呂、というものに人間は浸かる、と昔聞いたが、こんな感じか？」

「風呂？ ああ、すっきりするから、似てんじゃないかな。湯の中に浸かったり石鹸で体を拭ったりするから、残照さん、木製将棋盤のあんたには、無理だぜ風呂」

「久しぶりに儂を名前で呼んでくれたなあ、嬉しいことこの上ないのう」

「ツヤの出た姿見たら、ついね。ま、それじゃ定期クリーニングはこの位で。またそのうち来るから」

「おうおう、無理はせんでええでの」

昔ながらの土蔵の扉を締め、吉岡は家の玄関を開けた。

「あら、今日は早かったのね。一つだけ？」

「ああ母さん、将棋盤だけ磨いてきた」

「そう。あの将棋盤も、きつと年代物よねえ、私にはよく分からないけれど」

「本人曰く江戸後期の名人の弟子の練習作らしいぜ、荒々二百年つてとこだ」

父の靴を磨いていた母親と玄関口で鉢合わせた吉岡は、そんなことを話して家に上がった。

ガシガシ君買ってきてあるわよー、と玄関からの声に、吉岡は二階に上がろうとしたのをやめてキッチンに向かった。

「さて、と。台所の主に挨拶しないといつ刺されるか分かんないかな」

独り言のように言うと、一瞬金属同士が擦れ合うような音が鳴った。

「相変わらずひどい言いぐさね、私は刺したりしません。私たちを使つてざつくり、ぶつさりやるのつて人間じゃない」

「ごめんごめん、悪意ないから。昨日、研いでもらつた?」

「うん、ありがとうね。他の子たちのことまで心配してくれて」

「いや別にいいさ。ミス・セイシエルの頼みとあれば」

「あらやだ恥ずかしい。私なんてただの洋包丁扱いしてくれればいいのに」

「声を聞いちゃったからには、そんな訳にはいかないさ。他の子たちは目覚めそう?」

「ううん、まだ無理ね。あなたのお母さん私ばかり使うから、まだ他の子たち、目覚められる域にまで相当遠いわ」

「そう……おい、その他」

「ちよつとお、可哀想じゃないそれ。せめて包丁君たちとかつて呼んであげてよ」

「じゃ、包丁君たち。もつと使い込まれて、魂が入るところまで行き着くんだよ」

「私たちへの励ましありがとう。でもあんまり私に構つと、箸がまた嫉妬するわよ?」

「ああ、確かに。箸のみんなー、げんきかい」

からから、とどこかで鳴る。

「あの子たち、金属の私たちのこと、嫌ってるみたいに思うんだけど」



ど、りょうちゃんどう思うっ？」

「りょうちゃんはやめて、ミス。金物に当たって傷つくのが怖いんだろつよ、今度箸立てに金属の韓国箸でも混ぜとくよ」

「それ傑作ね」

キーンと金属が鳴る。

「さ……て、ガシガシ君は、と」

冷凍庫を開ける。ソーダ味のガシガシ君が、冷凍食品の上に無造作に置かれている。

「お楽しみタイム」

吉岡は言った。が、その手に伝わる冷たい感触の中に、吉岡は不意に熱感を感じ取った。

「はあ……また喋りたい物があるのかよ。ガシガシ君の芯だなきつと。とりあえず」

吉岡は袋を開け、手早く青いガシガシ君を食べ尽くした。当たり前、と焼き印された芯が、手に残った。

「当たり前じゃん、珍しい」

「当たり前って文字が焼かれてるんですか、僕は」

吉岡の手の中で、ガシガシ君のバーは小刻みに震えている。

「僕、他のみんなは静かなままなのに、突然首筋に熱いのを押しつけられて目を覚ましちゃったんです」

「ショック覚醒タイプだね、お気の毒に」  
「気の毒なんですか、僕は」

自分で言っておいて、吉岡自身ちよつと困った。

「まあ……もし何事も無かったら、君は何も思ふことすらなく消費されてゴミ箱行き、そこで焼かれて魂だけ天に昇って、次の、より上位の生命体に転生出来たんだよ。心が入ってしまったら、焼かれるのも、捨てられるのも辛くなるからね」

と、説得調で言った。

「はあ。それで僕の体はどうなってるんですか、何かおかしいですか」

「世にも珍しいガシガシ君の当たり棒、っちゃ、おかしいというより珍品かな」

「僕はどうなるんですか、珍品って言われても、うれしくありません」  
「だろう、ね……まあ、安寧に生きて朽ちていくのを望むなら、俺の保管箱の中にでも、洗ってから入ってもらってもいい。雑多なことだけど。もしその、なんだ、ガシガシ君の棒、っていう今の命が嫌ならば、俺は君をコンビ二に持って行って命を持たない君の仲間が芯になっているガシガシ君を受け取って、君をコンビ二に任せる。焼却処分になるだろうね」

「これ以上熱い目に遭うのは嫌です！」

ふるふる、と棒の先が震える。

「でも君、元々は熱帯の木じゃないの？」

「ネットタイ？ よく分かりませんが……僕がもつと大きな体で生きていたときは、燦々と降り注ぐお日様の光にエネルギーをもらいな

がら、足下にある土から美味しい水を飲んで、のんびり生きてました。けれど、人間がある時、とてもやかましい音を立てる機械で僕の胴体を切りにかかったんです。痛いからやめと叫んだけれど、最後の最後まで切られてしまう前に、僕は気を失いました」

「んー。典型的な魂の気絶の瞬間、ってとこだね。目覚めるところまでにどうなったか、推測混じりだけど説明してあげようか」

「はい、出来ればお願いします」

ガシガシ君の棒を片手に、ダイニングソファーに背を預けると、

「君は多分、熱帯の巨木だったんだろうね。胴体をばっさりやられたら、木は普通その瞬間に魂が抜け、宙に浮く。魂は気絶したままね。通常はその魂、月光か陽光に浄化されて天に引き戻されるらしいんだけど、時折そうでない魂がいる。それが君だ」

と吉岡は言った。

「はあ」

帰ってきた言葉に、納得の色は感じられなかった。  
しかし、とりあえず続けることにした。

「魂の事は目覚めの時まで置いとくとして、体、すなわち巨木の姿だった君の体は、バラバラにされて色々なものになっているはずだ。物を置く机や踏み台のような大きな物から、君のような小さな形まで様々に加工される。もっと小さな破片は、もう焼かれていると思うけれど」

「じゃあ僕も、もしかすると焼かれて昇天出来たかもしれないけど、たんですか」

「そうだねえ。ここからは僕も受け売りでしかないけど、生き物が

死ぬ時、木であれば根から引きはがされた時が、よく言う『往生際』  
つてもんらしい。けれど、たまに往生しない、要するに浄化されて  
天に昇らない魂もいるんだってさ。そういう魂は、元いた体の、魂  
の宿っていた部分に自然引き寄せられて、憑く。でもすぐに意識が  
戻る訳じゃないから、誰にも気づかれない。まあ元々、木々や物の  
魂の声を聞ける『耳』は、全世界見回してもとても少ないらしいし  
ね」

吉岡の、わずかに誇らしげな口調も、

「はあ、そうなんですか」

と、棒にはスルーされた。

吉岡はちよつと残念そうに眉を上げると、続けた。

「ま、話し相手に巡り会えただけでも相当ラッキーだとは思っよ、  
君は。で、だ。魂が眠ったままその部位も焼かれて、今度こそ寄り  
代が無いから昇天する、なんてことの方が多みたいんだけど、  
たまに運がいいのか悪いのか、魂が入った部位を叩かれたり釘を打  
たれたり、君みたいに焼き印を押されたりして、そのショックで魂  
が目覚めることがあるらしい」

「それが僕なんですか」

「そうみたいだね。ところで体の、というのも変か。聞こえるとか  
見えるとか、そういう感覚は、以前通り全部あるかい？」

「いいえ、音は聞こえますが人間の言葉がほとんど分かりません。  
それに今まで感じていた光を感じません。暗いんです」

「目の部分の魂が切られて分離したかな。それは取り戻せない」

「言葉が分からないのは何ですか」

「それは人間の話してる言葉の方が違うから。俺の話す言葉は魂に  
話す周波数らしくて何にでも通じるけど、君がいた場所ってここか

ら遙か何千キロってところだろうからね、人間たちが使っている言葉も違うんだよ。だから聞いても馴染みがなくて、分からない。違う言葉が分からないのは、人間も同じだけど」

吉岡は一息、うーん、と唸って、その棒と共に台所のシンク前に立った。

「ちょっと洗うよ、べたついてるから君」

「え、うわわ、あー……」

「それにしてもガシガシ君の当たりなんて初めて見たな。本当に当たり付きだったんだ……どうだい、これでさっぱり、べたつきも無くなった」

「はわぁ。気持ちよかったです」

「へ、そうなの」

「僕がもつと大きな体だった頃は、毎日のように上から、今みたいなザーッとした雨が降ってきたものですよ」

「スコールかな。今は台所のシャワー栓だけでもね」

「今の雨はちよつと変な、ツンとする臭いがありましたけど、さっきまでのべたべた感が無くなったので楽になりました。ありがとうございます」

ありがとうございます、と棒が言った瞬間、その棒は淡く青い光を帯びた。

「おお、御赦光じゃん。ガシガシ君、今なら君、天に昇れるよ。今の小さな体じゃ辛いでしょ？ 目もないし。もう一度、生命をやринаおしたら？」

「僕、ここの地に誰か終生語れる仲間がいる気がして、さつきからうずうずしてるんです。誰か僕と同じような運命の方はいないですか？」

「山ほどいるけど……」

吉岡は、蔵の中のうるさがた共を思い出して苦笑した。

「御赦光を得てなおこの地に留まりたいっていうからには、誰か縁の人か物かがあるんだろうね。蔵に連れてってあげるよ」

\*

「おいやい、なんぞ懐かしい息を感じるぞい」

蔵の、さつき吹き上げられた将棋盤の『残照』が、声と共にがたがた揺れた。

「残照の爺さん、そんなに体揺らすと、ヒビ入るぜ」

「そんなことより今、蔵の扉が開いたのと同じくして、遙か昔の懐かしい地の風を感じたんじゃ、なんぞ持っておるのか良二」

「ん？ ああそう言えば、残照さんも目を切られてたんだけ……  
アイスのバーって分かる？」

「アイスクャンデーのことなら、戦前にもあったで分かるぞ」

「そうそう、そのアイスクャンデーの芯の棒が目覚めちゃって、仲間がいる気がするとかいうから連れてきた」

「ん?! もしやパンジャルミタ・サンシャデジャーカ!」

残照、と名乗っていた将棋盤が、一際大きな声音を上げた。

「声でかいよ、俺にしか聞こえないって。他の奴らから苦情来るぜ、焼いちまえとか」

「そんなことはどうでもよい、その棒を、もそつと近くに」  
「はあ」

吉岡が残照に近づいた。

すると、手に持っている棒もまた、細かく振動するような素振りを見せた。

「ああ！ あなたは！」

「やはりお前か！」

物同士が声を上げる。

その一声を境に、吉岡の耳には、どこの言葉がよく分らない、訛ったような大きな話し声が轟いた。

「……ちよつとお二人さん、もう少し静かにやってくれないか、蔵の中に響いて、俺の耳痛いんだけど」

「ん、ああ！ すまんすまん！ こいつはな、遙か昔に儂と並んで生えとつた奴なんじゃよ、興奮せずにはいられまい！」

「だから残照さん、んなでかい声出さなくても聞こえるって。て、え？ 同じ木なの」

「そうじゃそうじゃ、儂は切られてから乾燥させられる、人間の言う『寝かせ』の期間が長かった木じゃから、すっかりこの国の木のつもりじゃが、本来は南蛮木じゃ。この形になって、表面のところ塗りをしてもらったのと、ずいぶん皆が磨いてくれたおかげでツヤも出たようじゃが、元はそいつ同様に表面は荒いもんじゃった」

「へえ。昔の職人の仕事は丁寧なもんで。それで、この棒とはどんな関係で？」

「ライバル同士じゃったなあ、若い頃の話じゃ。儂は間伐とか言われるな、いわゆる間引きで、若いうちに切られてしもうたが、そうかパンタは生き残って今の世まで根を張っておったか！」

再び興奮したように、残照の声が大きくなる。

「血管切れるぜジイサン、血管なんか無いけどさ」

「とうの昔に鋸で引き切られとるわい、わっはっは」

「おいおい、どこまで陽気になんだよホントに」

「あの……」

本当に小声で、棒がささやいた。

「僕の水気を拭いて、あの声の主の上に、置いてもらえませんか」

「ええ、ダメダメ。まだ洗ったばかりで、拭っても水分たっぷり含んでるんだから」

「そこを何とか」

「うーん、まあ残照さんの天面、塗ってあるから大丈夫かな。おい残照さん」

「おっ！ なんじゃどうした！」

「こいつ乗せるぜ」

「うひゃっ冷たい」

また何やら言うだろうと気構えていた吉岡だったが、冷たい、と言った直後、蔵に全くの沈黙が訪れた。一分、二分と、さっきまでの喧噪が嘘だったかのような静けさが続く。吉岡は蔵の壁に寄りかかって、将棋盤の上に乗っているガシガシ君の棒、というおかしな構図を眺めた。

「そうか……そうじゃったか」

沈黙を静かに破ったのは、残照だった。そのまま続けた。



「良二よ、どうやら僕は、お前さんの孫と戯れる時間は、残されていないようじゃ」

「へっ、どういうことよ」

良二は不意を突かれ、壁から離れ将棋盤に駆け寄り、その前にしゃがみ込んだ。

「僕が天寿を全うすれば、さっき言ったが十二年と二ヶ月は将棋盤として生きられた。しかし今このパンタが上に乗ったことで、今日この時から天面に染みが出はじめ、それが大きくなって木が朽ちる。十二週と二日で、僕は虫たちに粗方蝕まれる。その時が僕の寿命じやな、それより早く僕は蔵から追い出され、燃えるゴミか粗大ゴミか、じゃろうかの」

「ちょ、じゃ俺がこの棒つきれ乗せたのが、二百年の将棋盤捨てなきゃならん原因作っちゃったのかよ?!」

良二は手を伸ばし、ガシガシ君の棒を取ろうとした。  
が、

「いかんいかん、僕の運命はもう変わったのじゃ。たとえどんなに清潔にしようが消毒しようが、十二年と二ヶ月が十二週と二日に縮められたのは、もはや動かしがたいもの、僕はただそれを受け入れるだけじゃて」

「おいおい、そんなこと言ったってよ、じゃ、ものの三ヶ月で虫食いになるって? それが分かってるだったら、どこの消毒業者だって呼ぶし何だってするぜ、俺のお気に入りなんだから、あんたは」  
「お気に入りだったか? そりゃありがたい言葉を死に際にもらったもんじゃい。あんな」

と、残照は一息置いてから、

「このパンタの魂は僕の兄弟魂だと、今触れあつたことで分かつたんじゃない。根が繋がっておつたんじゃない、それを人間が、表面に出ている上つ面の木だけを見て、僕が成熟しそうにもないからと、切り倒したんじゃない」

と言つた。

「兄弟魂だと、何かあるのかよ、ジイサン」

努めて冷静を装おうとしたが、良二の胸にはきつく締め付けられる感覚があつた。

「兄弟魂、というがな、実際は……あれじゃ、ベトナム戦争で人間が作り出した悲劇、ダイオキシンの、ほれ」

「ベトちゃん・ドクちゃんのことか？」

「そうそう、あの者らと同じじゃ。本来切り離されては生きられんのだが、こういう訳か切り離された。だがあれらの者も、その実体は相当な無茶であつたろう、まだ僕を挟んで将棋談義をしてくれる相手がいた時に色々と聞いたわい。どちらがどうか、その後どうなったか僕は知らんが、仮に肉体をうまく切り張りしたのだとしても、もう片方は生物としての本質、すなわち魂を持ち得ないはずじゃ」

「まあ、確かに……どっちだったか俺も記憶にないけども、一人はもう亡くなつたとか聞いた。片方は結婚して云々とか」

「それこそ、僕が目を失い『残照』を名乗るようになったようなものじゃ。僕らのように動けない生物は、狙われるか否かに関わらず魂が宿る場所を傷つけられれば、その部分の機能を失う。僕であれば、光を失つた。一方、お前さん方のような柔軟な肉体を持つ生き物は、魂自体も柔軟に動けるだけの隙間、魂の逃げ場があるのじゃ

がな」

「それが、ベトナムのことと、一体どう関係があるんだよ」

吉岡は、目の前に生まれた時からあった将棋盤が朽ちることに、困惑が隠せないでいた。

「兄弟魂は、元々一つの魂じゃ。それが出会って、溶け合うように一つになる。そしてようやく、天に昇れるんじゃないよ。まあ魂が後から入ったような名品やら、愛でられ続けて魂の座を得た物は話が別なんじゃが、儂らのような雑多な物共は、そういう風にして材料の時代の魂を持ちあわせ、朽ちるまでの間だけ、この世に縛られるのじゃよ」

「残照さん、将棋盤としての生涯は嫌だったのかよ。いつも嬉しそうに、自分が将棋盤である誇りを語ってたじゃないか」

吉岡は将棋盤にがっしりと手をかけ、そして上に乗るガシガシ君の棒を睨んだ。

さつきまで、言葉と命の息吹を聞いたその棒からは、吉岡の耳に何も届くものがなかった。いつも見る、単なるガシガシ君の、ただしかし珍しいだけの、当たり棒だった。

「まあ、年寄りの強がりと諦めじゃよ。木、というのは、金属を含む石の類よりはマシじゃが、命が長いからの。人間のように自ら進んで死を選び、下位の生命体に転生するなどという離れ業も出来んまあ少しでも早く新たな命へと生まれ直せることを、祝ってくれい、良二やい」

「そう言われても、な……」

吉岡はその場にへたりこむように腰を落とした。

力無く、ガシガシ君の棒を取る。そこには棒状に、随分古くから

あつたようなシミがあつた。

「ああああ、本当にシミが出来てる」

「僕は嘘は言わん。正目の木は、そういう性格じゃからの」

「これ、この部分だけくり貫いて……って訳にもいかねえよなあ、将棋盤じゃなくなっちまうし」

「くり貫いたって運命は変わらんぞ。形ある物はいずれ朽ちる、それが少々早く訪れるだけじゃて。そう気を落とすな」

「朽ちる相手に言われても慰めになんねえよ……」

吉岡はシミの部分を眺めて、ため息を一つ吐いた。

「なんか俺、泣きそうだ」

「日本男児が泣いて良いのは、親を亡くしたときと財布を落とした時だけじゃぞ？」

「ざけてんじゃねえよ、生まれてからずっと一緒だった、実の爺さんみたいな相手が亡くなるのに手の打ちようがないなんてよ、どう我慢すりゃいいんだよ」

吉岡の目から、その言葉通り、大粒の涙がぽとりと、天面の角に落ちた。

その涙は、塗りが施してあるはずの残照の天面にスーッと染み込み、また一つシミを作った。

「見てみよ、己が雫すら染みになるのじゃ。木という生命としての命脈が、もはや絶たれたんじゃよ。人間も諦めが肝心とか言うが、木も同様よ」

「そんな事言わないでくれよ、まだ立派な将棋盤じゃねえかよお」

「将棋盤、か……そうじゃ、昔を思い出して、一局指すか」

「昔って……俺が残照さんの言葉通りに指して、親父をばろくそに

負かした、あの日のことか」

「ああその通りじゃ。儂が相手になってやる、飛車角に、桂馬まで落としてやってやるう。二百有余年、儂の上で繰り広げられた板上の戦いも最後じゃ、一切手加減はせんから覚悟せい。ああ勿論駒はお主に動かしてもらうんじゃがなあ」

と、残照が笑った。

「手加減抜きかよ」

と、吉岡はその腕で涙を拭って、

「よしつ、残照のジイサン、あんたが根えあげるまで指し続けるかな、そつちも覚悟しろよ！」

「望むところじゃ、さあ駒を」

促された吉岡が駒箱を開け、残照の上に将棋駒を勢いよくばら撒いた。

(了)

（後書き）

30本ノック、と題して、筆力向上のトレーニングをしています。  
是非コメントなど頂けたら、とても励みになります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6339u/>

---

その声

2011年10月3日16時36分発行